

1860年代にヨーロッパの絹産業は技術的に日本をはるかに上回っていたが、ヨーロッパのカイコの個体数は2つの病気によってほぼ完全に破壊された：カイコの幼虫が繭を回転させることができなくなる真菌性寄生虫に起因する「微粒子病」と、強い熱にさらされることによって引き起こされる非感染性の病気でカイコの幼虫を弱らせ死に至らせる「軟化病」である。健康なカイコの卵の価格はヨーロッパで急騰し、横浜に新しく開かれた絹市場ではシルクと卵の両方が大量に販売された。

同時期に、島村（現在の群馬県伊勢崎市）の農民たちが養蚕業者の協同組合を作り、カイコを育て、上質な絹を作り出した。明治以降、彼らは島村勸業という会社に再編成された。この会社は、カイコの卵をイタリアのカイコ農家に直接販売するために、田島弥平（1822-1998）という男が率いるグループを派遣した。島村勸業の創業メンバーの一人として、弥平は絹革命のリーダーとして知られている。

弥平はカイコを育てるための建物を設計した。長い建物の2階には、外気を取り入れるために開くことができる窓が付いた高い屋根の部分があった。この設計を使用して、農家は気流を制御し、カイコの周りの理想的な温度を維持することができた。新鮮な空気はカイコを病気から守り、収量を改善し、カイコ収穫の信頼性を高めた。弥平の設計は、島村村内や日本全国に急速に広まった。彼の貢献が日本の養蚕業に大きな影響を与えたことが評価され、彼の家は世界遺産の一部になった。